

## 認知症者の公共図書館利用に対する障壁 －認知症者の家族がもつイメージから－

中村 虎太郎

超高齢社会となった日本では、認知症に対する国家的な取り組みが進められている。その認知症施策の方向性を示した認知症施策推進大綱では、図書館に認知症にやさしい社会を支える基盤としての役割を果たすことが期待されている。それを受け、図書館では認知症に関する情報のコーナーを設置するなどのサービスが行われ始めている。しかし一方で、認知症者が図書館を利用する上で、認知症者の家族がその図書館利用を止めようとする事例がみられる。その理由は、認知症者が図書館を正しく利用できず、本人や他人の不利益となるかもしれないと認知症者の家族が考え、それを未然に防ごうとしたためである。

本研究は、このような背景から、認知症者の家族が持つ公共図書館への不安感が、認知症者の公共図書館利用の障壁になることがあるという仮説の下で、認知症者の家族が現在の公共図書館をどう捉えているかを明らかにするものである。特に、公共図書館に対するどのような認識が、その不安感に繋がっているのかに焦点をあてて考察を行う。本研究では、認知症者の家族から見た公共図書館に関する質問紙調査を行った。調査対象は、家族に認知症者がいる65歳以上の男女を各50名と65歳未満の男女各50名である。

調査の結果、認知症になって以後、認知症者が公共図書館へ行ったというケースは全体のわずか13.5%であった。加えて、認知症者が一人で公共図書館を利用することに対しても、彼らの家族全体の92%が不安を抱いているという結果となった。認知症者の家族が抱く公共図書館への不安につながる原因の分析を行った結果、その不安と、認知症者の家族が抱く公共図書館の印象の関係に関して、公共図書館に“知的”なイメージを強く抱いている人ほど、認知症者が一人で公共図書館を利用することに対して強い不安を感じているということが明らかになった。知的な印象が強い人は、公共図書館を「集中ができる」「静かな」場所として、ある種厳格で高尚なものとして捉えることで、自身の家族である認知症者が利用することを“迷惑”になると考えてしまうことが理由にあるのではないかと考えられる。公共図書館の知的な印象は、認知症者の利用に不寛容なイメージを形成しやすく、そのイメージによって認知症者の家族が不安を抱くことで、認知症者の公共図書館利用の障害に繋がると結論付けた。

以上のことから、認知症にやさしい社会を支える基盤として、図書館が注目される中で、今後の公共図書館が注力すべきなのは、認知症サービスをただ充実させることではなく、認知症者やその家族の利用に寛容なイメージを醸成することであると考えられる。そのために、公共図書館の印象という観点から、どのような工夫ができるのかを検討・考察していくことを今後の課題とする。

(指導教員 呑海沙織)